

まえがき（企画にあたって）

土 屋 弘 吉*

整形外科やリハビリテーションの領域で接する遺伝性疾患は、まことに枚挙の遑がない。おそらく、眼科領域と、整形外科、リハビリテーション科領域とは、遺伝性疾患の宝庫であるといっても過言ではないであろう。しかし、その多くのものは、適切な予防法も治療法も確立されてなく、またあるものは致死性ですらあり、臨床的アプローチの道も遠い。

しかし、最近の臨床遺伝学の進歩はわれわれに多くの光明を与えてくれた。遺伝学の道はまことに地味であり、かつまことに険しい。

今後5年、10年の歳月が過ぎてもそれほど目に見えるような進歩はみられないかもしれない。

しかし基礎遺伝学まで目を転じてみると、昨今の目まぐるしい進歩には驚かされる。そしてその基礎と臨床との接点において最近話題となった体外授精などの技術が発展して来たのである。

最初「総合リハビリテーション」誌から遺伝学について講座の企画をしてくれるようにとの依頼に接した時、私はリハビリテーション医学と人類遺伝学とが一体どこに接点を有しているのか全く判断がつかなかった。リハビリテーションは障害の発生を予防、治療し、それを訓練することによって、終局的には全人間的の復権を目標としている。

これに対し人類遺伝学は病気、それも遺伝的の疾病または異常の発生の機構を解明する科学であり、発生の防止は一つの重要な命題ではあるけれども、一旦発生してしまったものに対しては将来の再発を予防するための間接的の手を打つことが、でき得ることのすべてである。すなわちリハビリテーションと遺伝学とは応用の時点が全くずれていて噛み合わないのである。

このようなことから編集委員会の考えと私の考

えとは最初から喰い違っていたのであるが、その次の機会に私は編集委員会と直接に話し合う機会を持つことができ、編集委員会の意図したところは、「リハ医のためにすぐに役立つ」という意味は毛頭なく、「医学の中の一部門として、リハ医の一般教養として役立つ知識であればそれでよいのだ」という意図が明らかとなった。リハ医学においても遺伝性のある疾患を取り扱う機会が多いので、患者に対する説明の資料としても遺伝学の修得はプラスにこそなれ、マイナスになるものではない。このように受止めれば「総合リハ」における「遺伝学」の講座も決して無意味なものではなく、貴重な誌面を割くことの意味も生まれて来ようというものである。

以上のごとくいくらかの紆余曲折を経たのちに本講座の企画が決定したのだが、一旦お引受けしたからには執筆者にはその道の一流の人物を揃えることに意を用いた。勿論私の知識の偏りや不勉強もあって、意の届かなかった点はあるかもしれないが、少くともリハビリテーションを扱う臨床遺伝学の、雑誌としては最適の執筆者であると信ずる。

なお、私自身は名を連ねるに値しない者だが、編集の責任を委された関係上、仲間に加えて頂くことにした。

リハビリテーション医のための人類遺伝学
—— 遺伝性骨・軟部系統疾患 ——

1. 総論……………横浜市大名誉教授 土屋 弘吉
2. 骨・軟部系統疾患の遺伝
……………大分大整形外科 真角 昭吾
3. 致死性四肢短縮型小人症の遺伝
……………三重大整形外科 鶴田登代志
4. ムコ多糖類・ムコ脂質代謝疾患の遺伝
……………岐阜大小児科 折居 忠夫
5. 血友病の遺伝
……………神奈川こども医療センター 井沢 淑郎
6. 遺伝相談……………愛知コロニー 松井 一郎

* 横浜市立大学名誉教授